

処刑された死に戻りの  
隣国の第六王子は故国を捨て、  
ギロチンの皇女と  
復讐を誓う

◆ ◆ ◆

Sambon  
サンボン

illust. 僕

shokei sareta shinimodori no

dai 6 oji ha kokoku wo sute ringoku no guillotine kojo to

fukushu wo chikau



# CHARACTERS

◆ブリジット◆  
皇國の第一『皇女』。  
『妖精姫』と呼ばれるほどの  
美貌と可憐さを持つ。

◆セシル◆  
治癒能力を操る聖女。  
女神リアンノンに  
揺るがぬ信仰を捧げている。

◆エドワード◆  
皇國の王。統治力と  
武力の高さに由来した  
『金獅子王』という  
二つ名を持つ。

◆サイラス◆  
『皇國の盾』と呼ばれる、武人。  
豪快で義理堅い。  
アビゲイルに与している。

◆アビゲイル◆  
ストラスクライド皇國の  
第一皇女であり、処刑人。  
その冷酷さから『ギロチン皇女』と  
恐れられているが……

◆グレン◆  
『皇國の矛』と  
呼ばれるほど強い、槍使い。  
アビゲイルに与している。

◆ギュスター・  
ヴァルロワ王國の第六王子。  
故国に騙されて、  
殺された後に死に戻り、  
復讐に生きることを決意した。

## 序章

「ギュスター・ヴ。これから処刑される気分はどうだ?」

かつてのこの国……ストラスクライド皇国のかつての王、エドワードⅡオブⅡストラスクライド。彼が座っていた玉座に腰かけているのは、僕の兄であり第二王子であつたルイⅡデュⅡヴァルロワ。ルイは王族とは思えない下卑た笑みを浮かべ、尋ねてきた。

気分がどうかつて? そんなもの、最悪に決まっている。

僕はこんなにもヴァルロワ王国に忠誠を誓い、全てを捧げてきたというのに、その仕打ちがこれなのだから。

「そう睨むな。私としても助けてやりたいのはやまやまだが、残念ながら貴様の今の身分はヴァルロワ王国の第六王子ではなく、ストラスクライド皇国第一皇女の夫。こればかりはどうすることもできない」

ああ、そうだ。僕は王国によつて、この皇国に売られたんだ。  
皇国を打倒するために必要な準備期間を稼ぐための生贊として。

処刑された死に戻りの第六王子は故国を捨て、隣国のギロチン皇女と復讐を誓う

……いや、それは最初から分かつてていた。

それでも僕は、王国のために尽くしたんだ。ある時は皇国内の情報を王国へと流し、またある時は王国に利するために裏で謀略を行なう間者として。いつか父である国王陛下に、僕を必要な息子なのだと認めてもらえることを夢見て。

いや、父だけではない。兄達から、弟として……家族として受け入れてもらえる日を夢見て。

だけじ夢というのは、叶わないから夢なんだ。

その証拠に僕は、こうして手足に枷を嵌められ、罪人として芋虫のように地面に転がっている。

(ルイ……ツ!)

ルイへの……王国への怒りでどうにかなりそうな僕は、決して外れないことは分かつてているにもかかわらず、身体をよじって枷から手足を引き抜こうと力を込める。だが案の定、どうすることもできず、いたずらに自分の身体が傷つくだけだった。

すると。

「ルイ殿下、あまりギュスター・ヴ殿下を虐めないでください」

現れたのは、白と黄金を基調とした神官服に身を包んだ、銀髪とアクアマリンのような水色の瞳が特徴の一人の女性。

彼女の名はセシル＝エルヴィシウス。

西方諸国の各地に多くの信者を持つ、リアンノン聖教会の聖女。  
そして……かつて僕が憧れた女性。

「セシル……ツ!」

「……そのような顔をなさらないでください。私の力が至らぬばかりに、あなた様をお救いできなかつた。そのことに、私も心を痛めているのです」

セシルが僕の首と手にそつと触ると、その箇所が淡い光に包まれ、傷が治っていく。

そう……この女は、世界でただ一人、触れた者を癒す『奇跡』を使うことができる。まるで女神の化身であるかのような能力を持ち合わせているからこそ、セシルは聖女と呼ばれていた。  
「ですがご安心ください。あなた様の……ギュスター・ヴ殿下の魂は、きっと主リアンノンが導いてくださいます。愚かな魔女どもを浄化する炎とともに」

そう言うと、セシルはにたあ、と口の端を吊り上げた。

僕は思う。この女のどこが聖女なのだと。

その本性は、女神リアンノンを崇拜しない者、自分にとつて気に入らない者を“魔女”と呼び、火炙りにして興奮と愉悦を覚える狂信者に過ぎないというのに。

「ねえ？ あなたもそう思うでしょう？」

セシルが語りかけたのは、僕……ではなく、隣で同じように枷で手足を拘束されている、金色の

髪と血塗られた赤い瞳を持つ、美しくも血が通つていない人形のような女性。

僕の妻であり、ストラスクライド皇国第一皇女。

——『ギロチン皇女』アビゲイル＝オブ＝ストラスクライド。

彼女もまた、セシルと同じく多くの者をその手で処刑してきた。

罪人、ヴァルロワ王国の捕虜、皇国にとつて都合の悪い王侯貴族を、数えきれないほどに。そういう意味でも、アビゲイルとセシルは同じ人種なのだと言わざるを得ない。

僕はそんな彼女に恐怖し、拒絶し続けてきた。

三年前に皇国に生贊として差し出されたあの日から、ずっと。

「聖女セシル。君はどちらから処刑するべきだと思う？」

「どちらから、ですか……」

ルイの問いかけに、セシルは顎に人差し指を当て思案すると。

「こう申し上げてはなんですが、ギュスター＝ヴ殿下は王國に多大なる貢献をなさいました。此度の勝利も、全ては彼の功績によるもの」

振り返り、セシルは笑みを湛えて告げる。

貴様の言うとおり、僕は王國に尽くしたとも。

アビゲイルの夫という立場を利用して、王國軍をここへ……皇都ロンディニアへと招き入れた。それにより皇国は為す術もなく皇都を奪われ、今に至るというわけだ。

ああそうだ。僕は皇国を……『ギロチン皇女』を裏切り、この結末を招いたんだよ。

王国が……家族が、僕を皇国という牢獄から救い出してくれるのだと信じて。

いつまでも僕の帰りを待っている恋人……という皮を被つた、貴様の言葉を信じて。

「……ですが彼は、自らの私利私欲のために皇国を裏切った男。その功績以上に、罪は重いと考えます。そう、『ギロチン皇女』よりも」

「聖女セシルの言うとおりだ。大罪人ギュスター＝ヴには、最上の苦しみを与えた上で処刑するべきだろう」

二人の茶番を前に、僕は地面に唾を吐き捨てる。

仰々しいことを言つてゐるが、結局は形だけとはいへ王族である僕を処刑するための大義名分が欲しいだけ。

たとえ国王と使用人の間に生まれた不用な存在であつても、王子という肩書がある以上、ルイの一存では軽々に処刑できないからな。

ならば決まりだ。ギュスター＝ヴは妻であるアビゲイルが処刑されるところを見届けた上で、恐怖

に打ちひしがれたまま死ぬがいい」

「勝手なことを……つ！」

僕は血が出るほど唇を噛み、ルイを睨みつけた。

その時。

「ギュスター・ヴ様」

隣から聞こえる、抑揚のない声。

そちらを向くと、アビゲイルがこちらを見つめていた。

「……なんだ」

「この者達の言葉など、気になさらなくて結構です」

「は……？」

アビゲイルの言葉に、僕は思わず耳を疑った。

「お前も今、聞いただろう！ こうなつてしまつたのは、全て僕のせいなのだと！ ならお前は、僕に怒りを向けるべきだろう！」

「ええ、聞きましたとも。その上でこのような結果を招いたのは全て、聖女とは名ばかりの醜い女を筆頭とした悪魔のような者達の、『呪い』と『偏愛』であると申し上げているのです」

アビゲイルはそう告げると、ルイにしなだれかかっているセシルへと視線を移す。その人形のよ

うに美しい顔が、怒りと憎しみによつて歪んでいた。

皇国に来てからの三年間で初めて見せる、アビゲイルが感情を露わにした姿。

たとえ大勢の者を処刑する時でも、眉一つ動かさずにその血のように赤い瞳で冷たく罪人を見下ろしていたあの彼女が。

（何故……どうして……）

アビゲイルの表情に困惑する。だつて目の前の彼女は、僕の知つてゐる『ギロチン皇女』ではないのだから。

「違う！ この結果は、全て僕のせいだ！ お前だつて……お前だつて、僕のせいで死んだぞ！ もつと僕を恨めよ！ その歪んだ顔を、あいつらではなく僕に向けるよ！」

彼女の考えていることが分からず、僕はそんなことを叫んでしまう。

この結果を引き起こしてしまつた愚かな自分への嫌悪感で圧し潰されそうになる僕の心を、少しでも軽くしたくて。

僕のせいで処刑される憂き目に遭つたアビゲイルに憎まれることで、少しでも樂になりたくて。なのに。

「……いいえ、あなた様は何も悪くありません。それはこの私が、一番よく知つています。ただあなた様はあの者達に利用され、裏切られただけ

ルイやセシルに見せていた怒りの表情は消え失せ、いつものアビゲイルに戻っていた。  
まるで仮面を被つているかのような、何の感情も見えない表情に。

「……………」

「僕はもう、お前が分からぬよ。いつもは空氣でも見るかのような視線を僕に向けるくせに、あの連中には怒りを見せて。なのに、やはり僕にはいつもの顔しか向けてくれない」

僕は顔を伏せ、小さく呟く。

ルイとセシルにはあんなに感情をむき出しにしておきながら、アビゲイルは初めて会った時から僕に一切感情を見せたことがない。

怒りも、憎しみも、喜びも、悲しみも、その何もかもを。すると。

「そう、ですね……」

「アビゲイル……？」

表情には相変わらず変化がないものの、その真紅の瞳が揺れ、そして一滴の涙が、アビゲイルの白い頬を伝つた。

兵士が強引に、アビゲイルを断頭台に固定する。

「ぐ……つ」

「つ!? アビゲイル!」

くぐもつた声を上げたアビゲイルを見て、僕は叫んだ。

「待て！ まだ……まだ僕達の話は……つ!?」

「黙れ！」

彼女を止めようとした僕を、別の兵士が押さえつける。必死に身じろぎをするが、身動きができない。

「ギュスター・ヴ殿下」

「なんだ、アビゲイル！」

今まさに命を散らすというのに、表情を変えずにこちらを見つめるアビゲイル。僕はその真紅の瞳から、目が離せなかつた。

何故なら……確かに彼女は、涙を零していたのだから。  
「ずっと――」

――ダンツツツ！

「あ……」  
最期の言葉を言い終える前に、数多の血を吸つて鈍く光る分厚い刃が、無情にも彼女の……アビ  
ゲイルの白く細い首を断ち切つてしまつた。

処刑台の上に転がる、アビゲイルの首。

その表情は、先程まで見ていた無表情でも、セシルとルイに向けた怒りと憎しみの表情でもなく、  
ただ……不器用に、微笑んでいた……つ。

「あ……あああ……あああああ……つ」

気づけば僕は、嗚咽を漏らしていた。

セシルとルイの思惑に今まで気づくことができず、このような結果を招いてしまつた間抜け  
な自分に呆れ果てて。

『ギロチン皇女』アビゲイルのことを、何一つ理解できなかつた……いや、理解しようとしなかつ  
た愚かな自分への怒りで。

「うふふ……ご心配なさらずとも、すぐに逢えますよ」

口元を手で押さえ嘲笑う聖女の言葉を合図に、今度は僕が断頭台に固定された。兵士がギロチン  
の刃に繋がるロープを切るための斧を振り上げる。



処刑された死に戻りの第六王子は故国を捨て、  
隣国のギロチン皇女と復讐を誓う

「はあ……これでお別れだなんて、本当に寂しいです。お人好しで愚かな道化師さん」  
そんなセシルの言葉を聞きながら、今まさにその命を散らそうという刹那……ただ僕は願う。

——ここにいる全ての者に、絶望と苦しみを。

## 第一章

「は……っ!」

気づけば僕は、鏡の前に立っていた。

思わず首に手を遣り……繫がつていて。

処刑され、断ち切られてしまつたはずなのに。

「これは、一体……」

首をなぞり、鏡に映る自分を見つめる。

僕が今身に纏っているのは、あの時着ていた囚人服などではなく、寝衣だった。

それに、どことなく顔が幼いように感じるが……

何がどうなつてているのか理解できず、僕が困惑していると。

「失礼します。……あ、もう起きていらつしやったのですね」

現れたのは、かつて僕の侍女を務めていたデボラだった。

だけど、この女はアビゲイルとの婚約が決まつた時に解雇されたはず。なのにどうしてここにいるんだ……？

「起きたのであれば、呼び鈴を鳴らしてください。おかげで掃除が遅れてしまつたじゃないですか」

……ああ、そういうえばデボラはこういう女だった。

私生児である僕を常に見下し、侍女であるにもかかわらず言いたい放題。

侍女を入れ替える権力すら与えられず、むしろ我儘を言つて国王や兄達から不興を買うことを恐れていた僕は、文句一つ言わずにただ耐え続けていたんだつたな。

今から考えると、僕のそんな態度がこの女を増長させたのだから、自業自得ではあるが。

「なあ、デボラ」

「なんですか？ 忙しいんですから、いちいち声をかけないでください」

まるで僕などいないかのように部屋の掃除を始めるデボラに声をかけると、この女は見るからに不機嫌になつた。

「今日は何年の、何月何日だ?」

「はあ? 何を馬鹿なことをお聞きになられているんですか」

「いいから答える」

「つ!?

僕が低い声で聞いたことに驚いたのだろう。デボラの顔が僅かにひきつる。

だけどそれはほんの一瞬で、すぐに怒りを湛えた表情になると。

「……ヴァルロワ暦二〇七年の四月二十七日です」

デボラは吐き捨てるように答えた。

やはり僕は、処刑されたあの日から死に戻っていた。それも、六年も前……つまり、僕が十五歳の時まで。あまりのことには、ルイの手によって処刑されるまでの人生が悪い夢なのではないかと思ってしまう。

あり得ない出来事に、混乱を極めてしまったからだろう。その後少しの間記憶が飛び、気づけば僕は王宮の中庭で、一人ベンチに座っていた。

「……僕は、死に戻った……?」

そんなことがあり得るのかと思わず頬をつねってみるが、普通に痛い。つまり、少なくともここは現実の世界だということ。なら、やはり僕は過去の自分に戻ってきたのだ。どう考えても、その

は故郷を捨てて、隣国に亡命した僕の人生ではない。

答えしか導き出すことができなかつた。

だけど。

「だつたら……だつたら僕は、もう一度やり直せる……つ!」

僕は拳を握りしめ、静かに歓喜する。

神の悪戯なのかなんのかは分からぬが、僕は六年前の……十五歳の自分に戻ってきたんだ。

今度こそ失敗しないように、王国の言いつけを守つて家族の一員だと認めてもらう? それとも、

聖女セシルともう一度やり直す? 馬鹿な、あり得ない。僕のやるべきことは、ただ一つ。

「王国に、ルイに、聖女セシルに、復讐することだけ」

断頭台で首を落とされる刹那、僕は願つたんだ。

全ての者に、絶望と苦しみを味わわせるつて。

「あはは……その時が、楽しみだよ」

両手で顔を覆い、その内側で僕は口の端を吊り上げた。



部屋に戻ってきた僕は、ベッドに寝転がりながらひとり言ちる。

残念ながら、第六王子とはいっても王宮内でなんの権力もなく、僕にできることなんて何もない。死に戻る前の知識と経験を活かし、国王や兄達を見返して評価を高めるといったことはできなくはない。しかし、今さらあの連中にどう思われようが知つたことではないし、あいつ等のために尽くすなど論外だ。

「やはり皇国の力を借りるしかない、か……」

初代国王カレラ一世が建国してから二百年以上の歴史を誇るヴァルロワ王国は、西の海の先にある敵国ストラスクライド皇国と百年にわたる戦を繰り広げ、それは今もなお続いている。

戦乱と度重なる重税によつて民衆を圧迫し続けてきた結果、両国は疲弊し、今から三年後に五度目の休戦協定が結ばれることになる。

「死に戻る前的人生では、王国は向こうの要求を全て呑まれたんだつたな」

戦争ではヴァルロワ王国が終始劣勢を強いられ、その結果、休戦に当たつて王国はいくつも不利な条件を突きつけられた。

王国北部の軍港ノルマンドとその沿岸部一帯の割譲、少なくない額の賠償金に加え、皇國は王族の人質を要求した。

ただ。

「何故か向こうが要求した人質は、王国からしてみればなんの価値もない僕だつたんだよな」  
王国と百年もの間戦いを繰り広げてきた皇国は、かなりの数の間者をこの国に送り込んでいるはず。それを通じて、王国の内情を把握しているのだろう。

その上で僕を選んだのは『第六王子であれば御しやすい』という考え方からかもしれない。一応、僕もまぎりなりにも王族であるため、人質として体裁は取れている。もし僕を無視して休戦協定を反故にするような真似をすれば、王国は周辺諸国に『身内ですら平気で犠牲にする国』という印象を与えてしまい信用を失う、そう考えて。

……もつとも、『皇都襲撃計画』において王国は最初から僕を処刑する予定なのだから、所詮人質としての価値はないがな。

「……まあいい。どんな理由であれ、僕が皇国に人質に出されることは確定なんだ。ならそれを利用し、皇国に取り入つて王国打倒を果たすだけ」

そうだ。僕が復讐を果たす唯一の方法は、皇国の力を借りて王国を倒すことだけ。

戦においてはストラスクライド皇国が終始優位に立つてはいるのだから、まともにやり合えば王国に負けるなんてことはないはず。

あの『皇都襲撃計画』も、僕という駒がいて初めて成功したものなのだから。  
僕が連中の計画を逆手に取りつつ、犬猿の仲である王国を滅ぼすよう皇国を唆してやるだけで、

処刑された死に戻りの第六王子は故国を捨て、隣国のギロチン皇女と復讐を誓う

連中は簡単に破滅を迎えるはず。それは確かだろう」

これで、王国打倒への絵を描くことができた。

あとはどうやつて、皇国をその気にさせるのかだけど……

「……やはり、アビゲイル利用するのが手取り早いだろうな」

休戦協定により人質として皇国に差し出された僕だけど、さすがにそのままだと体裁が悪いということで、形式上は婚姻を結ぶこととなつた。

その相手こそがストラスクライド皇国的第一皇女である、アビゲイルだ。

「はは……今から考えれば、人質となつた不用の王子が『ギロチン皇女』の夫になるなんて、ある意味お似合いだな」

天井を見つめながら、僕は自虐的に笑う。

アビゲイルはその二つのとおり多くの者を死へと誘い、国内外で忌み嫌われている存在。

思わず目を奪われてしまうほど美しい彼女だが、その心は冷酷そのもの。燃えるような真紅の瞳には、まるで正反対の凍てつく氷のような冷たさを宿しており、細い右手を上げて次々と断頭台送りにしてきた女だ。

皇国へと渡つたばかりの頃、泣き叫ぶ貴族の一家を処刑する彼女の姿を見せつけられ、戦慄したのを覚えている。

だから彼女は皇国内で苦しい立場に置かれており、そのことを死に戻つた僕は知っている。

そんなアビゲイルだからこそ、僕があてがわることになつたのだろう。  
ただ……死に戻る前の僕は、作業のように処刑を行うアビゲイルに恐怖していたんだ。

「……だからいつも、僕はあの女から逃げ回っていたな」  
皇国で過ごした三年間を思い出し、僕は苦笑する。

人質である僕は、いつかアビゲイルに処刑されてしまうのではないかと怯えて、夫婦であるにもかかわらず公式行事の時以外に顔を合わせることなど一度もなかつた。  
言葉を交わしたことなど、婚約式と結婚式で形式的な宣誓を行つたあの二回きり。

「最後の最後で、初めて話をしたな」

処刑される間際、確かに僕とアビゲイルは言葉を交わした。

そして僕は、あの女が感情を露わにした姿を初めて見たんだ。

真紅の瞳から零れ落ちる、その涙も。

「……アビゲイルは、何を言おうとしたんだろう」

あの女は確かに、僕を見て何かを告げようとした。ルイがあとほんの数秒処刑を遅らせていたら、それを聞くことができただろう。でも、それを聞くことはもう、永遠にない……って。

「違う」

僕は身体を起こし、かぶりを振る。

処刑された日から六年前の今日に戻つてきた僕には、アビゲイルの言葉の続きを知る機会が与えられたんだ。何より、死に戻る前の僕とは違う。

「皇國に……いや、アビゲイルに取り入り、王國を滅ぼさせ、復讐を果たす。そう決めたのだから。

「とにかく、時間を無駄にするわけにはいかない。僕にできることを、最大限やらなければ」

幸いにも、王国による京都襲撃が行われるのは今から六年後。それまでにできる限りの準備と策を整え、王國と聖女セシルに、鉄槌を下す。

僕は拳を握りしめ、決意を新たにした。



「お、おい。あれ……」

「ああ……一体何しに来たんだ……？」

王宮内にある訓練場に顔を出すと、訓練をしていた王宮の騎士達が手を止め、皆一斉に僕に注目する。

これまで一度も訓練場に顔を出したことがない僕がいきなり現れたのだから、そういう反応も当然だ。だけど、僕も皇國へ渡るまでの三年間を、ただ無為に過ごすわけにはいかない。

何せ、敵国の王子である僕は皇國で狙われ続け、幾度となく暗殺されかかったのだから。

元々皇國に贈るために渡された支度金を、要求されなかつたのをいいことに着服し、私兵を雇つて僕を守らせたことで暗殺者の手から逃れることができたが。

「こ、これはギュスター・ヴ殿下。このようなむさ苦しいところへ、どのようなご用件で……？」

「貴様は？」

「はっ。王國騎士団で副長を務めております、エルマン＝バラケと申します」

バラケは胸に手を当て、名乗つた。

「そうか。僕は少し汗を流しに来ただけだから、気にしないでくれ

「で、ですが……」

「いいから」

何か言いたそうにしていたバラケを追いかねば、僕は訓練用の剣を手に取つて訓練場の隅へと向かう。

そして。

「……」「……」「……」

剣を構え、一心不乱に素振りを始める。

本国に渡れば、自分の身は自分で守らなければならない。

死に戻る前の人生では私兵を雇つて守らせていたが、今回はそういうわけにはいかないからな。支度金を含め、金も時間も全て復讐のためだけに使わなければ。銅貨の一枚たりとも、無駄遣いできないんだよ。

それに。

「きっとあの人は、容赦なく打ち据えてくるだろうからなあ……」

僕は死に戻る前の人生で出会った一人の男を思い出し、苦笑する。

彼はアビゲイルの夫となつた僕のことが気に入らず、ことあるごとに絡んできては訓練場へと引つ張り出し、稽古という名のしごきをしてきたんだ。

そのおかげで『京都襲撃計画』が実行される直前になると、僕もそれなりの実力を手に入れることができた。それだけは、不本意ながら感謝しないといけない。

……いや、違うか。あの人は僕がこれまでの人生の中で、初めて真正面からぶつかってくれた人だつたな。

「なら、再会した時には今度こそ見返してやらないと」

幸いなことに、死に戻る前の人生での人から教わり、培つた剣の技術は今も僕の中にある。足りないのは、それを十全に扱うための基礎体力だけ。だからこうして、技術を活かすための特訓を始めることにしたんだ。

「九百九十七……九百九十八……九百九十九……一千！」

一千回の素振りを終え、僕はその場でへたり込む。

さすがに初日からこの回数はやりすぎじゃないかとは思うが、残された時間には限りがある。立ち止まつている余裕はないし、甘えてなどいられない。

剣を杖代わりにして立ち上がり、次の訓練に移ろうとした。

その時だつた。

「どうしてこんなところに、ごみ屑がいるのだ」

聞こえてきたのは、僕に対する侮蔑の言葉。

ああ……いつか出くわすとは思つていたよ。

「目障りだ！ あの屑をつまみ出せ！」

王国騎士団長と将軍職を兼務する、王国最強の騎士にしてヴァルロワ王国の第三王子。

「ギュスター・ヴ殿下、申し訳ありませんが……」

「ここから退場願います」

二人の騎士が僕の両脇を抱え、強引に訓練場の外へと連れ出そうとする。

……まあ、素振りをはじめ基礎体力の特訓なら、ここでやらなくてもいいしな。いちいち相手にしてられない。

僕は少し乱暴に騎士の腕を振り払うと、疲労で覚束ない足取りながらも自ら訓練場の外へ出ようとする……のだが。

「待て」

騎士達につまみ出せと言つておきながら、今度は僕を呼び止めるのか。

意味が理解できず、僕は無言で振り返つた。

「どういう風の吹き回しか知らんが、所詮は下賤な者の血を引く無能の屑。剣を持つことすら不敬だ」

……言いたい放題じゃないか。

まあこの男は、五人いる兄の中で最も僕を見下しているからな。当然といえば当然の発言ではある。

「フイリップとて剣の実力がなければ、ただの筋馬鹿に過ぎないというのに。

「気が変わった。この肩に、本物の剣というものを教えてやれ」

そう言つてフイリップが目配せをすると、副長のバラケが一人の騎士を呼びつけて何かを話した。

ひょっとしたら、僕と試合でもやらせるつもりなのかもしれない。

「おい屑。この者と手合させをしろ」

「ほら、やつぱり。

「お断りします。そもそも僕は、今日初めて剣を握ったんです。王国騎士の相手になるはずがありません」

この言葉は嘘<sup>うそ</sup>じゃない。死に戻る前的人生ではこれでもかといふほど剣を振られ続けてきたが、少なくともこの十五年間、剣を握ったことはないのだから。

とはいえる。

「黙れ。誰が肩に発言を認めた」

「…………」

貴様がそう言うことも分かつていたさ。

僕を王子だと……弟だと認めていないどころか、人権すら認めていないことくらい。

だけど死に戻る前の僕は、貴様のような男にすら家族だと認めてほしかった。自分の馬鹿さ加減

に笑うしかないよ。

「はあ……面倒ですが、分かりましたよ。彼と手合させをして、恥をかけばいいんですね」

「つ！ 貴様！」

僕の態度と物言いが気に入らないフイリップが、青筋を立てて大声で叫んだ。

そんなこと、知ったことじやない。

もう貴様に家族として認めてもらいたかった僕は、この世界には存在しないんだよ。

「さあ、さつさと始めよう。僕も忙しいんだ」

「……どうかご容赦ください」

剣を構えて向かい合う対戦相手の騎士が、形式上は断りの言葉を入れる。

その表情を見る限り、少しも悪びれてはいないようだが。

「シツ！」

騎士が大きく踏み込み、突きを放つ。

なるほど。王国騎士だけあって、それなりの腕はあるみたいだ。

でも。

「なっ!?」

僕が半身になり躲かわしてみせると、騎士は目を見開いた。

突きの軌道は間違いなく僕の喉笛(のどぶえ)を通過していたし、一撃で倒すつもりだつたんだろう。下手をすれば、僕が死んでしまうが、それくらいとわざに。

残念だつたな。その程度の突きすら躊躇(ちゆうしよ)しないとなれば、僕はあの人に死ぬほどしごかれるんだよ。

「が……が、ひゅ……っ!?」

首に強烈な一撃を叩き込んでやると、騎士は白目(しろめ)を剥いて倒れる。

まあでも、僕に重傷(じゆうじょう)を負わせるつもりで攻撃を仕掛けたんだ。逆に食らつたとしても、文句はないよな。

「お、おい！ こいつをすぐに医務室に連れていけ！」

「は、はっ！」

慌てて駆け寄ったバラケ副長が、騎士達に指示を出す。

一瞬呆けていた騎士達も、びくん、びくん、とおかしな痙攣(けいれん)を見せる騎士の姿を見て、このままではまずいと悟つたようで、すぐに医務室へと運んでいった。

さて……当然、このままでは済まないよな……っ！?

「ぐは……っ!?」

「貴様ああああああああああッツッ！ 屑の分際(ぶんさい)で王国の宝(たから)である俺の部下を傷つけるなど、恥を知れッツッ！」

僕はフイリップに不意を突かれる形で後ろから思いきり背中を打ち据えられ、地面に倒れる。直情的で、無駄に誇りだけ高く、唯我独尊。分かつてはいたが、やはりこの男にとつて、僕のような男が勝利すること自体、許しがたいみたいだ。

「が……ぐ……っ」

「たまたま父上の血を与えただけの肩が、調子に乗るな！ 貴様のような肩は、即刻ここから……いや、この世から消え失せろツツツ！」  
フイリップは、倒れて苦しむ僕を全体重を乗せて蹴り飛ばすと、思いきり踏みつける。おかげで僕は息もできず、悲鳴を上げることすらできなかつた。

だけど。

（は……はは……なんだ、この、程度、か）

あの人、稽古のほうが何倍も辛く、何倍も厳しい。ただ蹴られるだけでいいのなら、こんなに楽なことはない。

それに、貴様が僕を蹴り続けてくれるおかげで、より楽しみで仕方ないよ。

貴様の顔が絶望に染まり、悲鳴をあげるその姿を見る、その時が。

「べつ！ おい！ この屑を捨ててこい！」

「はっ！」

◇

怒りに満ちた表情の騎士達に抱え上げられ、僕は訓練場の外に乱暴に放り捨てられた。

一応は僕も第六王子だから、仲間を傷つけられても手出しできず悔しい思いをしているようだけど、フイリップによってぼろぼろにされた僕を見て、騎士達もとりあえずは溜飲を下げたようだ。（まあ、知ったことじゃないが）

とにかく、想定外ではあったが騎士と手合わせをしたことによって、フイリップや王国騎士団の実力を肌で感じることができたのは大きい。

これなら、間違いなく僕のほうが強い。

呻き声を上げつつも、僕は満足してほくそ笑んだ。

「九百九十七……九百九十八……九百九十九……」

訓練場で騎士と手合わせをした日から一ヶ月後。

僕は誰も訪れることがない王宮の裏庭で、一人黙々と素振りをしていた。

死に戻る前的人生において嫌というほどあの人と手合わせをしてきた僕は、今さら誰かを相手にする必要もない。なら、剣の技術を存分に振るうために身体を鍛えることのほうが大事だ。

処刑された死に戻りの第六王子は故国を捨て、隣国のギロチン皇女と復讐を誓う

ちなみに、フイリップから受けた怪我はほぼ完治している。元々急所を外して受けていたので、精々打ち身や擦り傷程度で済んだ。

なお、僕と手合させをした騎士は、もう以前のような生活には戻れないらしい。

どうやら首の骨が折れていたようで、あの男の騎士としての人生は終わつた。

罪悪感はないのかつて？まさか、そんなものがあるはずがない。

むしろ将来敵となる兵を一人消すことができたんだ。僕としては大満足だよ。

「……今日はここまでにするか」

素振りを終え、僕は汗を拭つて裏庭を出る。

基礎体力を向上させるためには、地道な訓練を繰り返すしかない。

なあに、皇国に渡るまで三年あるんだ。焦らずに統ければいい。

そうして部屋に戻るために王宮内の廊下を歩いていると。

「あれは……」

窓から見えたのは、地面に跪いたまま詰問する侍女長に泣きながら許しを乞うデボラの姿だった。

「信じてください！私は殿下のものを盗んだりなどしておりません！」

「では、これは何なのですか？」

侍女長が掲げたもの。それは、ひびの入つたエメラルドがあしらわれたブローチだつた。

「どうしてこれをあなたが持つていたのか、説明なさい」

「し、知りません！そもそも私が、どうしてそのような無価値なものを……っ」「……地下牢に閉じ込めておきなさい。追つて沙汰が下されるでしょう」「待つてください！お願いします！私じゃない！私じゃないのおおおおお！」

手を伸ばし懇願するデボラだが、衛兵達はあの女を引きずり、そのまま地下牢へと連行した。  
「ははっ」

それを見て僕は、口の端を吊り上げる。

そうだ。エメラルドのブローチは、僕の亡くなつた母上の形見。<sup>かたみ</sup>それをあの女の懷にこつそりと忍ばせ、侍女長に告げ口をしたんだよ。

僕の部屋に出入りをする侍女は、デボラしかいない。その上で決定的な証拠となるブローチがあの女から出してくれば、誰が見ても犯人は彼女しかあり得ない、というわけだ。  
憐れデボラは王族のものを盗んだ罪人として……まあ、処刑されるだろうな。

「あの女がどうなると、知つたことじゃないがな」

いずれにせよデボラは僕のブローチを盗むのだから、それが少し早まつただけのこと。

そう……死に戻る前的人生においても、あの女はブローチを盗んだんだ。

デボラは僕が皇国に渡つていなくなるのをいいことに、ずっと大切にしてきた母上の形見を、王

宮を出る直前に盗むなんていうとんでもないことをしでかした。

残念ながらブローチを<sup>さが</sup>捜す時間も、犯人を突き止める時間もなかつたから、泣く泣く諦めたんだ。でも、あの女が犯人であることは間違いない。だつて、ブローチの隠し場所を知っているのは……いや、そもそもブローチの存在を知っているのは、唯一のお付きの侍女たつたデボラしかいないのだから。

「もし貴様も死に戻ることができたら、次はその手癖の悪さを何とかするんだな」  
吐き捨てるようにそう呟くと、僕は部屋へと戻った。



「本日付でギュスター・ヴ殿下付きの侍女となりました、マリエット＝ジルーと申します」

「…………」  
恭しくカーテシーをする侍女を見て、僕は押し黙る。

目の前の女は、一緒に皇国へと渡る際に僕の侍女となつた。  
マリエットが従者となるのは、王国と皇国が休戦協定を結んだ日の一週間後。つまり、今から一年八か月後。

その事実が覆つた理由は、一つしかない。

「…………デボラがいなくなつたから、早まつたということか」

聞き取れないほど小さな声で呟いた僕を見て、マリエットは不思議<sup>ふしきぎ</sup>そうな表情で首を傾げた。

「いかがいたしましたか……？」

「いいや、なんでもない」

なるほど、死に戻る前と違う行動を取ると、歴史というのは別の形で辻褄<sup>つじつま</sup>を合わせるというこ  
とか。

ならば、これを踏まえた上で復讐の手立てを考えなければな。

ただ、少なくとも休戦協定が結ばれるまでは、あまり余計なことをしないほうがよさそうだ。  
万が一にでも『皇都襲撃計画』の内容まで変わつてしまつたら、それを<sup>さかて</sup>逆手に取つて復讐しよう  
と考えている僕の策が崩壊<sup>ほうちかい</sup>してしまいかねない。

「じゃあ、これからよろしく頼むよ」

「はい。こちらこそ、どうぞよろしくお願ひします」  
作り笑いを貼りつけてそう告げると、マリエットも微笑みながらお辞儀<sup>じぎ</sup>をした。

……まあ、それはいいのだが。

「マリエットをどうするか、だな……」

誰もいない部屋のベッドに寝転び、僕は天井を見上げながら呟く。

マリエット＝ジル……あの女は僕の従者として一緒に皇国へ渡るのだが、実は聖女セシルの内通者でもあった。

セシルから指示を受けたマリエットはそれを僕に伝え、時には僕の代わりに『皇都襲撃計画』に必要な下準備を行うなど、重要な役割を担っていた。

いつからセシルと繋がっているのかは分からないが、僕の計画が露呈してはまずい。まずはマリエットとセシルの関係について、調べておく必要がありそうだ。

「ハア……やることが多い」

僕は、溜息を吐いてこめかみを押さえた。



「ふう……かなり体力がついたな」

死に戻つてからちょうど二年が経過した日の、王宮の裏庭。

日課である訓練を終え、僕は身体の感触を確かめる。

あれから一切目立つことなく、僕は一人黙々と身体を鍛え続けてきた。そのおかげで処刑されたあの日の自分よりも、体力や筋力がついたのは間違いない。

今ならあの人を倒せるのではないかと、錯覚してしまうほどに。

「……はは、そんなわけがないか」

僕は苦笑し、かぶりを振る。

剣の技術を磨き上げ、こうして体力も増加して格段に強くなつたからこそ分かる。

あの人は、正真正銘の化け物だ。

「まあ……だけど、自分の今の実力がどれほどのものなのか、胸を借りてはみたいな」

ともあれ、あと一年もすれば会えるのだから別に焦ることはない。それより優先するべきは、今以上に訓練を重ねて少しでもある人に近づくことだろう。

そうすれば、死に戻る前の人生では教わることができなかつたその先の領域へと、いざれ辿り着くことができるかもしれないから。

「よし！ 次は素振りだ！」

両頬を叩いて気合いを入れ直し、僕は剣を握り一心不乱に振るう。

すると。

「ギュスター・ヴ殿」

現れたのは、マリエットだった。

僕の侍女を務める彼女には普段の予定を全て伝えており、誰も訪れる事のないこの裏庭で訓練していることも知っている。

「どうした？ わざわざここに来るなんて」

「実は殿下にお客様がいらっしゃっております」

どこか思いつめた表情で、マリエットが告げる。

その灰色の瞳に、期待と諦めが入り混じったような色を湛えて。

彼女の様子を見て、僕は誰が訪れたのかを理解する。

(……ようやくか)

僕はこの時を待っていた。

「分かった。すぐに支度しよう。ああ、それと……」

そう言つてマリエットに二、三指示を出すと、急ぎ部屋に戻つて着替えを済ませる。

これから会う者には、少しの違和感も抱かせるわけにはいかない。

何故なら。

「うふふ……お会いできて光榮ですわ。ギュスター・ヴ殿下」

王宮の庭園。慈愛に満ちた微笑みを湛え、目の前の女性は胸に手を当ててお辞儀をする。

「そう……休戦協定の九か月前の今日は、僕が聖女セシルと初めて出会う日だ。

「こちらこそ！ まさか聖女様が僕なんかに会いに来てくださるなんて、思いもよりませんでした」

僕はわざと興奮した素振りを見せ、挨拶を返した。

死に戻る前的人生では、初めて見たセシルの美しさに目を奪われたことを覚えている。  
きっとこの女は、そんな僕の反応を見て利用しようと考へたはず。なら、それと同様に振る舞つて、死に戻る前と同じ行動をさせるようにしないと。

「それで、本日はどうなご用件で？」

セシルを促して互いに席に着くと、僕は单刀直入に尋ねた。

「もちろん、ギュスター・ヴ殿下にお会いするためまいりました。殿下は王室の行事にもあまり参加なさいませんし、なかなかお会いする機会もありませんでしたので」  
「そうでしたか……」

使用者が淹れてくれたお茶を口に含み、僕は頷く。

確かに死に戻る前は、その言葉に舞い上がつていたなあ……間抜けな自分を殴つてやりたい。  
「ですが……うふふ」

「な、何か？」

「いえ。まさかギュスター・ヴ殿下が、これほどまでに素敵な殿方だとは思いませんでした。それに、王者としての風格も備えていらっしゃるようで」

口元を手で隠し、セシルはそんなことを宣つた。

こんな見え透いたお世辞に引っかかる馬鹿はいるのかと言いたくなるが、実際に引っかかったのは死に戻る前の僕。穴があいたら入りたい。

「ご、ご冗談を。ご存じかも知れませんが、僕は国王陛下と使用人との間に生まれた第六王子。こうして聖女様とお会いして言葉を交わすだけでも恐れ多く……」

「いいえ、そんなことはありません。殿下は確かに、いずれ素晴らしい偉業を果たされ、御方だと思つております」

僕の手を取り、潤んだアクアマリンの瞳で見つめるセシル。

ああそうだな。貴様の言う偉業というのは、『皇都襲撃計画』のこと。やはり、この時点ですそういった想定をしていたのだろう。貴様や王国の指示に従つて墓穴<sup>ぼけ</sup>を掘る道化たる僕を、彼女は裏で嘲笑ついていた……そんな事実を思い出し、怒りが腹の底から湧く<sup>わ</sup>を感じる。

しかし、それを露わにするわけにはいかない。

「ああ……主リアンノンのお告げに従い、ギュスター・ヴ殿下に会いに来てよかつたです。これからもどうか、こうして私と会つていただけませんか……？」

歓喜の吐息を漏らし、セシルは上目遣いで懇願する。

分かっている。休戦協定が結ばれるまでの間、定期的に会う中で僕を籠絡<sup>ろうらく</sup>するつもりなんだろう?

『私の言葉に従えば王国はあなたを見直し、正式に家族として認めてくれるはず』などと甘言<sup>かんげん</sup>を囁いていて。

だけど。

「ええ！ 聖女様がよろしいのであれば！」

僕は勢いよく立ち上がり、セシルの手を強く握る。そして、感極まつた表情で何度も頷いてみせた。

当然、演技だ。

僕としても、この女に使い捨ての駒<sup>こま</sup>だと思われたほうが裏をかきやすく、色々と都合がいい。そうすればセシルは、死に戻る前と同様に『皇都襲撃計画』の情報を僕に流してくれるだろうからな。

これなら『皇都襲撃計画』が死に戻る前と大きく変わらないように手を打つことができる。

そんなことを考えていると。

「うふふ……本当に、可愛いらしい御方……」

「つ！」

熱を帯びた視線をこちらに向けたセシルにいきなり頬を撫でられ、僕の身体が強張る。

……こんなこと、以前はなかつたんだが……

「ご、ご冗談はおやめください。その……」

「失礼しました。……ですが、ギュスター・ヴ殿下はあまり女性をご存じないのですね」

そう言うと、セシルはぺろり、と唇をなめずる。

その姿はあまりにも妖艶で、蠱惑的で、以前の僕ならば間違いなく引き込まれてしまつただろう。今の僕にとつてはただただ不快でしかないわけだが。

「では、次にお会いできる日を楽しみにしております」

「は、はい」

席を立ち、何事もなかつたかのように部屋を出てゆこうとするセシル。

僕は。

「その……一つお伺いしてもいいですか？」

「はい、構いませんよ」

「聖女様には『奇跡』と呼ばれるお力があつて、どんな怪我でも……いや、怪我だけに限らず病すらも治すことができるとか。それって……」

「うふふ、確かに私は怪我を治すことはできますが、さすがに病まで治療することはできません。

それは主リアンノンに背き、与えていたいた運命を捻じ曲げる行為ですので」「そ、そうですか……」

セシルの答えを聞き、僕はあからさまに肩を落としてみせた。

「その、ギュスター・ヴ殿下のお知り合いに、病に冒されている方がいらっしゃるのですか……？」

「……以前世話になつた者が、病で臥せていると風の噂で聞きました。それで、聖女様ならもしかすれば、と考えてしまいました」

「本当に申し訳ありません……私にもつと力があれば……」

「どんでもない！ 聖女様は何も悪くありません！ むしろそのような失礼なことを聞いてしまい、誠に申し訳ありません！」

落ち込むセシルを見て、僕は慌てて弁明し謝罪するふりをしつつ、内心ほくそ笑んだ。

やはりセシルには病を治す力までは備わっていない。そのことをこの女の口から語らせることができて、僕は満足だ。

「そ、それでは聖女様、玄関までお送り……」

「セシル……まさか君が王宮を訪ねてきているとは、思いもよらなかつたぞ」

庭園を出ると、ルイが待ち構えていた。

僕とセシルが会つてることを、使用人の誰かから聞きつけたのだろう。

「もう用事は済んだんだろう？ ならこれから私と……」

「うふふ、申し訳ありません。この後は午後のお祈りがありますので、また次の機会に……」

セシルが微笑みながらやんわりと断ると、ルイは苦虫を噛み潰したような表情を浮かべる。

……そういえばこの二人は、死に戻る前的人生においては恋仲だったな。仲睦まじい姿を、処刑台から嫌というほど見せつけられたことを思い出したよ。

「なら、せめて玄関まで送ろう」

「ありがとうございます」

ルイは僕が視界にいるはずなのに存在しないものとして無視し、セシルの手を取つて庭園を出でいった。

ただ一人、その場に残された僕は。

「……マリエット、聞いたか」

「はい……」

現れたのは、悲痛な表情を浮かべるマリエットだつた。

彼女には茂みの中に隠れていてもらい、僕達の会話を聞いてもらつていたのだ。

マリエットが侍女となつたことを受け、僕は、彼女の素性について調べていた。

すると、彼女がジル一子爵家の長女として生まれたことや実家が貧しく、家財道具などを売つ

てなんとか生計を立てていることが分かつた。

そんな彼女にはカミーユという弟がおり、残念ながら不治の病に冒されているらしい。

弟の治療にはかなりの費用がかかり、マリエットはお金を稼ぐために王宮で使用人として働いているのだ。

「可哀想だが、あの聖女様であつても君の弟を治すことはできないそうだ」

「お、お待ちください。どうして殿下が、私の弟のことを……？」

「応僕は、君の主人に当たるんだ。なら、君がどのような人物なのか把握しておくのは当然だろう」

「…………」

僕の言葉を受け、マリエットは唇を噛んで俯いてしまう。

ひよつとしたら、弟のことを僕に知られたくないかもしれない。そのせいで、王宮から追い出されてしまうことを危惧している可能性は十分にある。

確かに他の兄達であれば、マリエットの境遇について気にも留めないだろうし、下手をすれば後々面倒になると考え、早々に解雇することもあり得るだろう。

だけどそれ以上に、マリエットは口惜しいだろうな。  
セシルであれば弟を治せるんじやないかという夢が、打ち碎かれてしまったのだから。そうなる

と彼女に残されているのは、今までどおり弟の治療費を稼ぐために、身を粉にして働くことだけ。だから。

「……君の弟が生き続けるために必要な治療費、僕が用立ててもいい」

「つ!?」

マリエットは勢いよく顔を上げ、目を見開いた。

「お、恐れながらギュスター・ヴ殿下は、その……弟の治療費に充てるだけのお金を持ち合わせていらっしゃらないと思われます」

侍女を務める彼女は、僕の懐事情もよく知っている。

それでもあえてそう提案した理由。それは。

「心配いらない。一年後には、君の弟の治療費だけでなく、ジル一家を再興するだけのお金を工面

できるはずだ」

そう……一年後、僕は皇國の人質になることで、多額の持参金を手にことができるんだ。死に戻る前的人生では、それを私兵を雇うために使つたが、あの人から剣術を学び、それを活かすため鍛え上げられたこの身体を手に入れた今、それは必要ない。

何より、アビゲイルに取り入ることさえできれば、そのような危険な目に遭うこともないだろう。

「……殿下はこの私に、何をお望みなのでしょうか」

その細い腕で自らの身体を抱きしめ、マリエットが尋ねる。

少し怯えているように見えるが……何か勘違いされではないだろうか。

「これは、侍女として僕に仕えてくれている君への感謝の気持ちだよ。何せ、この王宮には誰一人僕の味方がいないからな」

「そんなことは……」

「気を遣わなくてしなくていい。これは事実だ」

そう言つて僕は苦笑する。

使用人の子供である不用な王子の僕は、これまでずっと独りぼっちだ。だから彼女を味方にしたいと思うことは、何も不自然ではない。

「よ、よろしいのでしようか……」

「もちろん。ただ、これからも僕のことを支えてくれると嬉しいな

「はい……はい……っ」

灰色の瞳から大粒の涙を零し、マリエットは何度も頷く。

彼女もまた、ずっと報われない人生を過ごしてきたに違いない。それが僕のお金によつて、弟を生き永らえさせることができる。マリエット自身も、これ以上苦労することもなくなるだろう。

「さあ、僕のことは気にしなくていいから、君は少し休んでくるといい。さすがに泣き腫らした顔

で仕事をされたら、僕の管理責任を問われてしまう

「あ……そ、そうですね。申し訳ございません」

マリエットは深々とお辞儀をすると、庭園から出ていった。

「……僕は、酷い男だな」

彼女の背中を見つめ、呟く。

王宮内において力がないために苦労したが、セシルとマリエットの関係を調べたことで、現時点では二人は通じていないことが分かった。

それを踏まえると、セシルは病に臥せる弟の治療を条件にマリエットを懐柔し、利用した可能性が高い。

ただ、先程セシル自身が『病まで治療することができない』と語っていた。つまり、マリエットを騙したことなのだろう。

死に戻る前の世界では僕が処刑された後、マリエットも始末されたと考えるのが妥当。『奇跡』で病を治すなどという嘘を吐いたとしても、マリエットさえ生き者にすれば問題ない。

「本当に、へき反吐がへき出る」

セシルの卑劣なやり方に思わず吐き捨てるように呟いた。

だが、僕も彼女と同じように彼女の弟の治療費を餌にしてマリエットを利用しようとしているの

だから、そんなことを言う資格などない。

そんな自分自身に呆れ、思わず苦笑してしまう。もつとも、僕はマリエットとの約束を反故にするつもりはない。

とにかく。

「これで僕は、ようやく手駒を一つ手に入れることができた」

セシルや王国に復讐するための、ほんの小さな一步に過ぎないかも知れない。

だけどこれは、今まで何もできなかつた僕にとって、とてもなく大きな一步でもあるんだ。

こうして僕は、少しずつ積み上げる。

——復讐へと至る、ただ一つの道を。



さらに月日は流れ。

立ち読みサンプル  
はここまで